

韓国における「都城」の英訳考:UNESCO世界文化遺産のICOMOS評価書を中心に

扈 素妍[†]

† 奈良文化財研究所

キーワード: UNESCO、ICOMOS、翻訳

On the English Translation of “doseong” in Korea: Focusing on UNESCO Advisory Board Evaluations

Ho Soyeon[†]

† Nara National Research Institute for Cultural Properties

Keywords: UNESCO, ICOMOS, translation

はじめに

1995年、石窟庵と仏国寺・海印寺蔵經板殿・宗廟がUNESCO世界文化遺産に登録された。その後、韓国では世界に韓国の文化遺産の価値を伝えるために積極的に文化財政策を施し、UNESCO世界文化遺産登録にも励んできた。そのため、2010年代にも南漢山城（2014）・百濟歴史遺跡地区（2015）など、韓国の遺跡がUNESCO世界文化遺産に登録されつつある。このような積極的な世界遺産への登録の動きは韓国だけではなく、日本や中国、また、アジア全体の姿勢であった。それは世界遺産へ登録されることで得られる経済的利益や、衰退する地域社会の活気づけ、国家アイデンティティの強化が期待されるためである。

ところで、UNESCO世界文化遺産へ登録されるためには、当該遺産が世界遺産として如何なる価値があるのか、その登録の意義を英語で書く必要がある。ただUNESCO世界文化遺産評価委員は皆英語のネイティブではないため、簡潔で、解りやすい英文にしなければならない。さらに、それを念頭において、各国の文化の特有な概念や用語を英語でどう表現すればいいのかも考慮しなければならない。

「都城」もそのような用語の一つで、「都城」という漢字語自体は中国・韓国・日本で考古学・歴史学の専門用語として使われている。しかし、各国において、また、時期によってその用語がいつも同じものを意味するわけではなく、専門家

によってもその定義が異なる場合がある。その上「都城」は東アジアの古代の政治体系、社会情勢、建築様式などと関連し、重要な用語であるため、特に古代の遺跡・遺産を英語で説明しようとする際、それをどう翻訳するかは難題である。殊にその性質が他の「都城」とは異なる場合は一層ややこしくなる。本稿は、そのような場合に備えて、「都城」という用語が、韓国では如何に翻訳されているのかについて事例を紹介するものである。

韓国の考古学・歴史学における「都城」の英文訳用例

韓国の考古学・歴史学における「都城」の英訳文に表れる用例は次の通りである。まず、古朝鮮・新羅・百濟・高句麗の首都に関する論文の場合、「都城」や「都邑」という漢字語を使用し、その英文タイトルでは「Royal City」「Capital」「Capital City」と訳した用例が確認できる^[1]。

ところで、そもそも、韓国の考古学学界における「都城」の定義は、韓国の『韓国考古学事典』^[2]によると、「王が日ごろ居住する宮城と官府及びその周辺をとり囲んだ城郭であり、軍事的目的の他に政治・経済・社会・文化の中心役割を担っていた」^[3] 場所とされている。一方、同事典で「邑」については、「文明の発達につれて流通経済の発展は人口の集中化現象を伴い、従って都市が形成」されるが、この「都市に城壁を巡らした」ものを指すと定義されている^[4]。以上を総合してみると、韓国の考古学・古代史で「都城」や「都邑」という言葉を使う際には、「城」の存在が前提条件になっていることがうかがえる。

一方、馬韓などの中央集権国家になる前段階の複合的な族長制度の社会における首都のような場所については、「中心地」という言葉を使った用例が確認できる。この場合、英文抄録では「socio-political center (capital)」と訳した事例が確認できる^[5]。

[1] ①박순발「고구려의 도성과 묘역 (高句麗の都城と墓域)」『한국고대사탐구』12 (2012) の英文タイトル→On the Capital of Koguryo and its Cemetery

②권순홍「『三國史記』의 도성 관련 용어 분석 (『三國史記』の都城関連用語分析)」『한국사학보』82 (2021) の英文タイトル→Analysis of Terms Related to Royal City in Samguk Sagi

③윤내현「고조선의 도읍 위치와 그 이동 (古朝鮮の都邑位置とその移動)」『고조선단군학』7-7 (2002) の英文タイトル→Location and Transfer of GO-CHOSUN's Capitalなど。

[2] 国立文化財研究所編『韓国考古学事典』(国立文化財研究所(韓国)、2001)。

[3] 同上、290頁。

[4] 同上。

[5] 최몽룡「馬韓: 研究現況과 課題」『馬韓·百濟文化』22 (圓光大學校 馬韓·百濟文化研究所、2013) など。

UNESCO世界文化遺産のICOMOS評価書(Advisory Body Evaluation)などに表れる「都城」「首都」の英訳用例—韓国・北朝鮮を中心に—

※註の頁数は、各遺跡に対するICOMOS評価書の頁数である。また、引用文等における下線は筆者によるものである。

1 古代遺跡

まず、韓国と北朝鮮で UNESCO 世界文化遺産に登録されている遺跡の中で、「都城」という用語や飛鳥・藤原京との関連性が高いと考えられる古代遺跡の例を紹介する。ユネスコ世界文化遺産に登録された韓国の古代遺跡は、「慶州歴史遺地区 (Gyeongju Historic Areas)」と「百濟歴史遺跡地区 (Baekje Historic Areas)」がある。この中で、新羅の首都は一貫して慶州であったが、「高句麗や百濟のように王京を取り囲む羅城はない、一方、四方へ山城を築造して都城の防衛を試みた」^[6] とされている。

一方、百濟の場合、河北慰礼城→河南慰礼城→漢山→漢城→熊津→泗沘へ変遷されたが、泗沘は確かに羅城の存在が確認できる。しかし、熊津は軽部慈恩が植民地期に調査して提示した「羅城存在説」について議論がある状態である^[7]。しかし、熊津の場合も山城は存在していたため、「都城」と表記している。

このように、慶州や熊津には羅城はなかったが、羅城があった泗沘などと同じく、英文のタイトルでは「capital」という言葉を使っている。例えば、「百濟の熊津遷都と防備体制の対する研究」という論文の英文タイトルが「A Study on the defensive system and the transfer of the capital to Woongjin of Paekche」であることから確認できる。

さらに、上記の「慶州歴史遺地区 (Gyeongju Historic Areas)」と「百濟歴史遺跡地区 (Baekje Historic Areas)」のユネスコ HP (英語) を確認すると、「慶州」は「the capital city of the Silla Dynasty」、「熊津」は「the capital, Ungjin」で、「泗沘」は「the capital, Sabi」となっている。また、「百濟歴史遺跡地区」の位置を紹介する文章のなかでは、そこが「the remains of three capital cities collectively represent the later period of the Baekje Kingdom」であると述べられている。ここで、「three capital cities」になっていることから、羅城がな

[6] 前掲『韓国考古学事典』、292頁。

[7] 이병의 「百濟의 熊津 遷都와 防備 體制에 대한 研究 (A Study on the defensive system and the transfer of the capital to Woongjin of Paekche)」公州教育大学校教育大学院修士学位論文 (2002)。

かった「熊津」や羅城があった「泗沘」を使い分けずに「capital」または「capital city」という英語を使用していることがうかがえる。

その上、「慶州歴史遺地区」のICOMOS評価書には「History and Description」の「History」の部分で、「先史時代から現在の慶州の町の周辺には人が住んでいた。新羅は紀元前57年に半島南東部の覇者になり、首都として慶州を選んだ。その後、隣国間の内部闘争が長く続いた」^[8]と、慶州が新羅の「capital」となったことを簡略に説明している。

また、「百済歴史遺跡地区」のICOMOS評価書中、「Brief description」では、百済歴史遺跡地区の構成と意義を次のように説明している。

それらの遺跡〔百済歴史遺跡地区を構成する8つの遺跡のこと—筆者註〕は、熊津首都（公州）に関連する松山里の公山城と王家の墓と、泗沘首都（扶餘）と関連する扶蘇山城・官北里遺跡・定林寺址・陵山里古墳群・羅城、そして、第二の泗沘首都に関連する王宮里の王宮と益山の弥勒寺である。これらの遺跡は、百済が中国から都市計画、建設技術、芸術、宗教の原則を受け入れたことと、百済がそれらを改良し、その後、日本と東アジアへの流通したことを証明するものである^[9]。

これをみると、「熊津（公州）」「泗沘（扶餘）」「第二の泗沘」という地域名の性格について、「capital」という言葉を使用して、これらの政治的中心地としての性格を示していることが読み取れる。この「the Ungjin capital Gongju」「the Sabi capital Buyeo」「the secondary Sabi capital」という表現は、この評価書

[8] 「There has been human settlement at and around the site of the present-day town of Kyongju from the prehistoric period. The Shilla clan became the rulers of the south-eastern part of the peninsula in 57 BCE. They chose Kyongju as their capital. There followed a long period of internal struggles between rival kingdoms.」 116頁。

[9] 「They are the Gongsanseong fortress and royal tombs at Songsan-ri related to the Ungjin capital Gongju; the Busosanseong Fortress and Gwanbuk-ri administrative buildings, Jeongnimsa Temple, royal tombs in Neungsan-ri and Naseong city wall related to the Sabi capital Buyeo; the royal palace at Wanggung-ri and the Mireuksa Temple in Iksan related to the secondary Sabi capital. Together these sites testify to the adoption by the Baekje of Chinese principles of city planning, construction technology, arts and religion; their refinement by the Baekje and subsequent distribution to Japan and East Asia.」

に繰り返されている^[10]。また、熊津以前の首都であった「漢城」^[11]や中国の「洛陽」^[12]について説明するところでも、「capital」を付してその地域の性格を表している。ここで、「capital」は「Ungjin」「Sabi」「the secondary Sabi」という地名に馴染みのない読み手のために、そこが当時の首都の役割をしたことを分かりやすく、また簡潔に説明する機能を担っていると考えられる。

一方、UNESCO世界文化遺産に登録されている北朝鮮の古代遺跡である「高句麗古墳群 (Complex of Koguryo Tombs)」のICOMOS評価書には、「THE PROPERTY」の「History」に、次のような用例が出てくる。

要衝の地である平壤は、古代韓国（古朝鮮）の首都として長い間、政治、経済、文化の中心地であった。そのため、高句麗は首都をここに移し、発展に多大な努力を払った^[13]。

この王国で最もよく知られている文化遺産は、石で造られ、石または土の塚で覆われた何千もの墓である。高句麗が首都を平壤に移すと、多くの壁画を含む土墳墓が普及したが、王国の他の地域にも存在していた^[14]。

ここでは「古代韓国（古朝鮮）の首都」と表現されているが、実際に古朝鮮の首都の位置や様式については、議論がある^[15]。すなわち、ここでの「the capital」

[10] 「The property」「Description」中

「The nominated component properties are the Gongsanseong fortress and royal tombs at Songsan-ri related to the Ungjin capital Gongju; the Busosanseong Fortress and Gwanbuk-ri administrative buildings, Jeongnimsa Temple, royal tombs in Neungsan-ri and Naseong city wall related to the Sabi capital Buyeo; the royal palace at Wanggung-ri and the Mireuksa Temple in Iksan related to the secondary Sabi capital.」113頁、など。

[11] 「The Ungjin capital Gongju was built by the Baekje from 475-538 CE 130km south of Seoul after the capture of their earlier capital Hanseong by the Goguryeo.」113頁。

[12] 「In the later Sabi period the royal palace at Wanggung-ri illustrates the rectangular planned layout of the East Asian royal palace of the 6th-7th century, similar to Luoyang, capital of the Northern Wei Dynasty.」116頁。

[13] 「PyonYang, situated in a strategic location, had long been the political, economic and cultural centre, as the capital of ancient Korea (Kojoson) which is the reason why the Koguryo kingdom moved its capital here and made great efforts in developing it.」60頁。

[14] 「The best known cultural heritage remains of this kingdom are thousands of tombs, built of stone and covered by stone or earthen mounds. Earthen mound tombs, including many with murals, were prevalent once Koguryo moved its capital to Pyonyang – but existed in other parts of the kingdom as well.」58頁。

[15] 송호정「고조선（古朝鮮）의 위치（位置）와 중심지（中心地）문제에 대한 고찰（Historical Research

は、様式など考慮せずに、「政治、経済、文化の中心地 (the political, economic and cultural centre)」としての機能を表す言葉として使われたことが読み取れる。

以上を総合すると、韓国と北朝鮮では、古代における首都に関する説明を英文に訳す時、そこが「都城」として相応しい様式なのかという問題より、「政治、経済、文化の中心地 (the political, economic and cultural centre)」という機能を説明する政治史的な用語としての「capital」、または「capital city」を使用したことが確認できる。

2 朝鮮王朝期の遺跡

韓半島の近世に当たる朝鮮王朝期の遺跡も UNESCO 世界文化遺産に登録されている。その中の「昌徳宮 (Changdeokgung Palace Complex)」の評価書では、「History and Description」の「History」で、昌徳宮 (Changdeokgung) の歴史を、「朝鮮王朝初期には、首都が開城と漢陽（現在のソウル）の間を何度も移った。父、定宗の意志に従い、この王朝の三代目の統治者である太宗 (1400-18) は、1405年に首都を漢陽に戻した。既存の景福宮が不吉であると考えて、彼は昌徳宮（輝かしい美德の宮殿）と名付けた新しい宮殿の建立を命じた」^[16] と、説明している。ここにおいても、特に政治的中心地という機能として「the capital」という言葉を使っていることがうかがえる。

さらに、「朝鮮王陵 (Royal Tombs of the Joseon Dynasty)」の評価書においては、陵の位置や様式について説明した後、その陵にまつわる儀式について述べる部分で次のように説明している。

王家の墓に関連する先祖の儀式は、神聖なものと見なされている。儀式は朝鮮後期から大韓帝国の短期間 (19世紀後半から20世紀初頭) まで行われていた。日本の植民地支配下と韓国戦争中には、儀式は中断されていたが、朝鮮王朝と関連した儀式を維持する手段としてその後 (1966年) 復活した。儀式の場所は、王が敬意と尊敬を表すために父親の墓に密接にアクセスする必要

on Gojoseon's Historical Geography)」『한국고대사연구』58 (2010)、など。

[16] 「In the early years of the Choson Dynasty in Korea, the capital moved many times between Gaeseong and Han yang (present-day Seoul). In obedience to the will of his father, Chongjong, the third ruler of this dynasty, Taejong (1400-18), moved the capital back to Hanyang in 1405. Considering the existing Kyongbokkung Palace to be inauspicious, he ordered a new palace to be built, which he named Ch'angdokkung (the Palace of illustrious Virtue).」

があることを考慮して首都のソウルに近いという理由で選ばれた^[17]。

この部分では、「the capital = Seoul」となっている。ここで、ソウルは現在の韓国首都の地名のみならず、元々「首都」を意味するハングル語であるため、朝鮮王朝期の首都をソウルと表記する用例も多い。ここにおいて「the capital」は、一国の首都という象徴性を強調する役割を果たしていると考えられる。

そして、「南漢山城 (Namhansanseong)」の場合は、その歴史的特殊性が「emergency capital (非常時の首都)」としての役割を果たしたことにあるため、評価書にも何度もその言葉が登場している。例えば、「1 Brief description」、「2 The property」の「Description」、「3 Justification for inscription, integrity and authenticity」、「Comparative analysis」と「Justification of Outstanding Universal Value」、「7 Conclusions」、「8 Recommendations」の項目で「emergency capital」という言葉が繰り返されている^[18]。

[17] The ancestral rites associated with the royal tombs are considered sacrosanct. They were practiced until the late Joseon period and into the short period of the Daehan Empire (late 19th-early 20th century). Under Japanese colonial rule and during the Korean War, they were stopped, but revived afterwards (1966) as a means to preserve the ritual practices associated with the Joseon Dynasty. Sites were chosen for their proximity to the capital, Seoul, which reflects the need for kings to have close access to their fathers' graves in order to pay due respect and honour.

[18] 「Brief description」中

「Namhansanseong was designed as an emergency capital for the Joseon dynasty (1392-1910), in a mountainous site 25 km south-east of Seoul. A city that has always been inhabited, and which was the provincial capital over a long period, it contains in its fortifications evidence of a variety of military, civil and religious buildings. It has become a symbol of Korean sovereignty.」183頁。

「The property」の「Description」中

「The fortress city was designed in its present form by the Joseon dynasty, in the early 17th century, as an emergency capital for Seoul, located 25 km to the north-west in the lowlands. It could accommodate a population of some 4,000 people, and fulfilled important administrative and military functions. It was the regional capital of the Gwangju district from 1624 to 1917.」60頁。

「Justification for inscription, integrity and authenticity」「Comparative analysis」中

「From the 14th century on, the Joseon dynasty made quite frequent use of the mountain fortress, but they remained relatively modest in size, and their military effectiveness was often limited. The Japanese invasion marked a turning point, with the use of firearms and the appearance of a real threat to Korean independence. Namhansanseong bears witness to this change both in terms of its size (as it became a proper town and an emergency capital) and its quality, with the definition of a new fortification model which represents a synthesis of various foreign influences. From this point on, the Joseon dynasty built a considerable number of relatively large fortified towns in the mountains.」

「Amongst the fortified sites that have been recognised in Korea (about 250 sites), Namhansanseong stands out because of its dimensions, its large number of functions, and the fact that it is an emergency capital.」

「These are indeed walled towns with ramparts, often on elevated land or utilising naturally defensible positions; they accommodate large urban ensembles that are generally well preserved, along with administrative and religious buildings. Without weakening the specific characteristics of the fortified

ところが、一ヶ所だけ「emergency capital」ではなく、「a royal emergency city, close to the capital of the Joseon dynasty」と表現されている部分がある。それは、「17世紀に設計された南漢山城の都心組織は、朝鮮王朝の首都（the capital）に近い、王室の緊急都市（a royal emergency city）の傑出で、保存状態の良い例と考えられる」^[19]と、南漢山城がユネスコの評価基準（Criterion (iv)）の「(a) 人類の歴史における重要な段階を示す、ある種の建物、建築または技術のアンサンブルまたは景観の優れた例であること」に満たすものであると説明する部分である。ここで「a royal emergency city」と表現したのは、おそらく、その後に続く「close to the capital of the Joseon dynasty」で「the capital」が使われているため、用語重複で説明が紛らわしくなることを避けるためであると推測できる。

その上、南漢山城は、1624年から1917年まで広州地方の地方首都であったことを説明するため「the provincial capital」^[20]と「the regional capital」^[21]という言葉が使われている。すなわち、政治的中心地という機能を表す言葉として「capital」に、その性格を明確にするため、「emergency」や「provincial」「regional」を付けて敷衍していることを確認できる。

以上から、ここにおいても「capital」は政治的中心地という機能を表す言葉として使われ、「capital」がもつ特殊な性格があれば「emergency」や「provincial」「regional」を付けて敷衍していることが分かる。

ensemble of Namhansanseong, they set it into perspective and give it all its meaning in the context of Eastern Asia, where it expresses both a conceptual advance in fortification and a vision of the emergency capital that are specific to the property.」186頁、など。

[19] 「Criteria under which inscription is proposed」の中

「Designed in the 17th century, the organisation of the urban centre of Namhansanseong constitutes an outstanding and well-preserved example of a royal emergency city, close to the capital of the Joseon dynasty.」188頁。

[20] 「Justification of Outstanding Universal Value」中

「Permanently inhabited, the city was the provincial capital over a long period, and it includes within its fortifications evidence of a wide variety of military, civil and religious buildings.」187頁。

「Description of the attributes」中

「A city that has always been inhabited, and that was the provincial capital over a long period, it includes inside its fortifications evidence of a wide range of military, civil and religious buildings.」189頁。

[21] 「The property」の「Description」中

「The fortress city was designed in its present form by the Joseon dynasty, in the early 17th century, as an emergency capital for Seoul, located 25 km to the north-west in the lowlands. It could accommodate a population of some 4,000 people, and fulfilled important administrative and military functions. It was the regional capital of the Gwangju district from 1624 to 1917.」183頁。

おわりに

以上を総合すれば、韓国と北朝鮮では、UNESCO 世界文化遺産に登録するため、「都城」かそうでないかなどの議論の余地がある部分には触れず、その地域が歴史的に政治と文化の中心で、行政的役割を担っていたという機能的意義が重視されていた。そのため、「capital」または「capital city」を使用して、読み手が理解しやすく、簡潔に内容を伝えようとしたと考えられる。このような事例を踏まえて、これから日本や韓国で UNESCO 世界文化遺産への提出書類を作成する時に役立つことができるならば幸いと思う。